（教育委員会用）

２０１９年度「学校における交流及び共同学習を通じた障害者理解（心のバリアフリー）の推進事業」成果報告書

団体名	滋賀県

Ⅰ　概要

１　選択したテーマ

テーマ	取組項目	選択
①交流及び共同学習を継続的な取組とするために、教育課程への位置付け等、組織的かつ計画的な取組の在り方に関する研究	（ア）通常の学級に在籍する全ての児童生徒等に交流及び共同学習の機会を学校として計画的に実施するための方法に関する研究	○
	（イ）障害のある児童生徒及び障害のない児童生徒等が、交流及び共同学習を通じ、共に尊重し合いながら協働して生活していく態度を育むために、交流及び共同学習のねらい、事前学習と事後学習、年間指導計画への位置付けの効果的な工夫に関する研究	○
	（ウ）通常の学級の担任などの教職員が主体的に交流及び共同学習に取り組むための体制整備の在り方及び教職員の意識向上に関する研究	
	（エ）ＩＣＴを活用した交流及び共同学習に関する研究	
②学校間交流や居住地校交流等を進めるための関係する教育委員会との連携の在り方の研究	（ア）特別支援学級が設置されていない小・中学校における学校間交流を推進するための学校と教育委員会の連携の在り方に関する研究	
	（イ）高等学校おける学校間交流や居住地校交流を進めるための学校と教育委員会の連携の在り方に関する研究	
	（ウ）学校間交流や居住地校交流等を進めるための市町村教育委員会と都道府県教育委員会又は市町村教育委員会と市町村教育委員会の連携に関する研究	
	（エ）居住地域の小・中学校等に副次的な籍を置くなど、居住地域との結びつきを強める工夫に関する研究	
③障害のある大人の人との交流や地域における高齢者等の世代を超えた交流の在り方に関する研究	（ア）障害のある大人の人との交流に当たり、福祉部局や社会福祉法人等と連携したネットワーク形成に関する研究	
	（イ）教育委員会と地域の関係者による「心のバリアフリー連絡協議会（仮称）」を設置し、取組状況や実施体制などの成果と課題について協議するなど、地域に心のバリアフリーの意識を啓発し根付かせるための研究	
	（ウ）高等学校の生徒や特別支援学校の高等部の生徒が、継続的に地域の障害のある大人の人との交流をするための方策に関する研究	

２　事業の概要

①視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由の県立特別支援学校10校をモデル校に指定し、各々の学校で実施している小中高等学校との学校間交流や居住地校交流等の場を利用し、交流及び共同学習を行った。また、障害者スポーツの専門家を招き、国際大会における体験談等の講演を聞いたり、実技指導を受けたりすることで、障害者スポーツの興味・関心を高め、特別支援学校卒業後の余暇活動の充実等を図る取り組みを行った。

（事前学習）

ダンスやボール遊び等での交流を計画した取り組みでは、事前に特別支援学校に交流校の児童が来校し顔合わせと施設見学を行った。それを受け、交流校の児童が交流会での活動ルールを考えたり、配慮事項を考えたりするなど、障害者への配慮について考える機会となった。また、特別支援学校の教員が交流校に出向き、交流校生徒を対象に、特別支援学校の子どもたちのことや障害のこと、当日の活動における配慮点等についてプレゼンテーションソフトを使って具体例を挙げながら話をした。

（スポーツ）

「ボッチャ」「サウンドテーブルテニス」「卓球バレー」「エアボール」等の障害者スポーツや「サッカー」「ダンス」「卓球」「軽スポーツ」を交流及び共同学習に取り入れ、特別支援学校と小中高等学校の児童生徒が、身体を動かすことの喜びや、同じ目的に向かって協力する一体感などを味わうことを目指した。

また、県立特別支援学校卒業生である障害者アスリートを招き、体験談等の講演の後、卓球の模範実技（デモンストレーション）に続き、参加生徒へのワンポイントアドバイスを受ける活動を行った。

（文化・芸術）

「ちぎり絵」活動による交流会では、交流校の美術部生が事前に下絵を考えるなどの事前準備を行い、交流会当日は両校生徒が色紙を使って虹の絵を完成させた。さらに完成した共同作品を各校の文化祭で交流学習の成果として展示した。

また、聾話学校の交流会における「ラミネートフィルムを使ったステンドグラス下敷き作り」では、県立美術館職員による指導の下、地域の小中学校生と学年や校種をこえてグループを作って制作を進めた。完成した作品を鑑賞し、感想を言い合うなどして交流を深めた。

（事後学習）

交流会終了後、学習の振り返りを行うため、参加した児童生徒や学校関係者、その他参加者に感想の聞き取りやアンケートを実施し、事業の成果と課題を総括した。

３　事業の成果

①　交流会実施前に事前学習を行ったことにより、過去に交流会に参加した生徒だけでなく、初めて特別支援学校の生徒と関わった生徒も、相手生徒の障害等を踏まえ自分で関わり方考えて、意欲的・主体的に活動に参加する姿が見られた。

高校生との卓球バレーやボッチャ等の障害者スポーツを通じた交流会を実施した特別支援学校の取組では、毎年この取組を実施していることから、両校の生徒はこの交流会を楽しみにしており、「違う学校の友だちと交流することで仲良くなり、友だち感覚で話せてすごく楽しかった。」といった感想があった。また、初めて交流会に参加した生徒からは、「障害のある人に対しての偏見がなくなった。」「特別支援学校に行くことに迷いがあったけど、遊んでいるうちに楽しくなってきた。」といった感想があり、交流前と交流後に気持ちの変化があった生徒が多く見られた。毎年同じ時期に交流会を実施していることで、交流会に向けて期待感を高めている生徒が両校に年々増えていることがうかがえた。

特別支援学校卒業生で、ロンドンパラリンピック卓球日本代表選手を招いての講演、実技指導の取組では、特別支援学校在籍当時に頑張ってきたことや、社会人としての日常の生活、国際大会での様子等の話を聞いた。この講演では、特別支援学校の生徒にとって身近な先輩による講演であることから、親近感を持って興味深く聞くことができた。また、夢を持ち諦めずに努力し続けることで必ず夢は叶うこと、東京パラリンピック日本代表を目指し今現在も努力を続けていることなどの話が聞けたことから、生徒たちが自分を顧みる機会となり、今後の学校生活に対する意欲を高めることができたと考える。さらに卓球の模範実技（デモンストレーション）と、ワンポイントアドバイスを受けたことにより、障害者スポーツに対する興味・関心を深めることがでた。それに加え、世界で活躍する選手の実技レベルを体験したことで、トップアスリートの技術力の高さを体感することができた。この取組により、特別支援学校に在籍する生徒がこれからの学校生活を有意義に過ごそうとする意欲が高まるとともに、卒業後の余暇活動等への充実につながると考える。

聴覚障害特別支援学校の児童生徒と地域の児童生徒との「ラミネートフィルムを使ったステンドグラス下敷き作り」の取組では、毎年交流会を実施していることから、久しぶりの再会に昨年のことを思い出す姿もあり、今回の交流会でさらに交流を深めるきっかけになった。また、昨年度の反省から地域小中学校への参加の呼びかけや参加申込書の配付を確実に行うなど交流会の周知を図った。広く参加を呼び掛け、地域の児童生徒が交流会への参加に期待を寄せることで、次年度以降も交流会を開催しようとする機運を高めることにつながり、この交流会が今後も継続的な取組となると考える。

中学生との「ちぎり絵」を通じた交流会で、特別支援学校の授業や学校行事の様子、生徒の障害特性や配慮点等を映像にまとめ、視聴による事前学習を行ったことで、初めて交

流会に参加する生徒も、意欲的・主体的に活動に参加する様子が見られた。完成した共同の作品を両校それぞれの文化祭で展示したり、特別支援学校の授業で交流会の活動を思い出しながらちぎり絵に取り組んだりすることで、楽しかった交流会を思い出すとともに、来年度の交流会開催の期待感を高めることができたと考える。また、他の学校においても、事後学習で感想文の記入やアンケート等、交流会の振り返り学習を行ったことで、今後も交流会を継続して取組みたいという意識付けができ、さらに交流会の反省点や改善点を洗い出すことにより、来年度以降の取組に向けて、より良い交流会を計画するきっかけ作りになったと考える。

４　事業の課題とその解決のために必要な取組

①　美術館職員を招き、「ステンドグラス下敷き作り」を通じて地域で学ぶ聴覚障害のある児童生徒との交流会を実施した特別支援学校では、昨年度の反省を踏まえ、参加者を増やすことを目的に前年度より活動計画の作成を早め、地域で学ぶ聴覚障害のある児童生徒への参加申込書の配付を徹底した。しかしながら、在籍校での部活動等との兼ね合いで中学生の参加者は減少した。地域の小中学生が、参加への期待をよせ、自ら意欲的に交流会に参加し交流を深めようと思う内容を準備検討する必要がある。

また、障害者スポーツの専門家を招いてゴールボールに取り組んだケースでは、モデル校の教員が専門家と面識があったことから、連携も取りやすくスムーズに交流会を進めることができた。今後障害者スポーツの専門家による指導や障害のある音楽家による演奏会等、交流会の内容をさらに充実させるには、専門家等の問い合わせ先（各障害者スポーツ協会の連絡先等）を一覧にまとめるなどして、モデル校が事業の計画立案を立てる際の参考となる資料を作成することなどで、幅広い内容の交流会を計画立案することにつながると考える。

高等学校と併設されている知的障害単独の特別支援学校における交流会は、複数年継続して取り組んでいることから、両校生徒が見通しをもって活動することができた。生徒の自主的な活動を大切にすることで自然な形での生徒同士の交流が進み、そのことが単発の取組で終わるのではなく、継続した取組につながると考える。

特別支援学校の児童生徒の障害の実態に応じてではあるが、交流会を教師主導型の、参加することだけが目的の行事とするのではなく、事前学習での計画・立案、交流会開催時の司会進行等、生徒による自主・自発的な活動へと導くことが、交流及び共同学習を継続的な取組とするのに必要なことだと考える。